
リアルサバイバルゲーム

自宅警備兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアルサバイバルゲーム

【Nコード】

N8243Y

【作者名】

自宅警備兵

【あらすじ】

ひきこもりがちな主人公一色武は、ある日サバイバルゲームの誘いを受けコンビニで待ち合わせをする。しかしコンビニに強盗が現れ、金ではなく「食料を出せ」と要求する。不審に思う武を他所に突如何者かに強盗が突き飛ばされ、事態は一変する。外には血まみれの人々が人を襲っていた。その地獄絵図の様な光景を目の当たりにした武等は、先ほどまでの強盗と協力して、コンビニから脱出した。しかしその先に待っていたのは、自分達に銃を向ける、新たな刺客だった。ゾンビが蔓延する世界で、ひきこもりの主人公と仲間

達が巻き起こす、リアルサバイバルゲーム

外に出たから……（前書き）

初めて投稿します。こちらの作品が処女作ですので、文章や表現など足らぬところがあると思いますが、暖かく見守っていただけると嬉しいです。この作品を機会に、少しずつ不定期ですが、小説活動をしていきたいと思っています。

外に出たから……

【強気をくじき弱きを助ける】

そんな正義の味方に、誰もが一度憧れただろう。勧善懲悪の精神で、いつも悪を倒しヒロインを助けるのだ。まるで「感謝の気持ちだけで十分」と言わんばかりに、金も貰わず去って行く……

そんなヒーローに僕は憧れていた。

20XX年 東日本 7月26日 午前7時50分

引き籠もりがちな僕、一色武中学三年生はこの日、久々に友達いっしきたけるの三人と遊びに行った。

内容はサバイバルゲーム。なんでも同年代の中学生でサバゲーのチームを組んでいる子達が隣町に居るらしい。その子達と対戦にいくのだ。バスで行くのだが、友達とは一旦近くのコンビニで待ち合わせている。

（早く着きすぎたかな？）

早歩きすぎただろうか？久々のサバゲーで気持ちが高ぶっていたせいだろう。まだ友達は来ていない。

暑い日差しの中、武はコンビニの前をウロウロする。エアガン入りの長いリュックは目立つので店内には入りたくないのだ。人通りの少ない日陰に移動して待っていよう。そう考えて店内に入らず僕は足早にコンビニを離れようとする。

「おーい！武！何処行くの？」

足を止め振り返ってみると、そこにはこの対戦を企画した友達の鈴木隆太が居た。武は鈴木が居ることに安堵した。一人では心許無かったのだ。挨拶もそこそこに店内に入る。

「隆は店の中にいたのか。気づかなかったよ」

「普通店の中に居るだろ？コンビニ集合なんだから。」

「それもそうだけど……その荷物は目立ちすぎじゃない？」

そう言つて隆の背中を指差す。そこにはコンビニには似つかない銀色で長方形のガンケースが堂々とぶら下っていた。店内の客の好奇の眼差しも気にしていない。歩くたびにBB弾の音を響かせながら、隆は飲料コーナーへ向かう。

「そんなに目立ってるか？一々気にしてたら街中でアタッシェケース持てないぞ」

「いや凄く目立ってる……街中でだってそんな長方形のケース持つてたら目立つよ」

「そうだな。まあコンビニ強盗とは間違われないうにしないとね」

そう言つてスポーツドリンクとレジ前のガムを店員に出す。この間にもBB弾の音はなる。

（面倒起こさず無事に会計を済まして出て行ってくれば、店員もそんなに気にしないだろう……）

そう思つていても、僕は早く店の外へ出たかった。ただでさえ外が怖いのだ、下手に注目なんか集められたらたまつたものじゃない。

……薄々気が付いていたが、他の客は余り気にしていないようだ。考えすぎは良くない。

レジで隆が出した十円ガムの一つ一つを、バーコードを読み取っている店員は、若い男性だ。名札を見てみると、山田太郎やまだたろうというらしい。平凡な名前だ。それにしても

「うるあああ……!! 全員動くなああ……!!」

店内に大声が響き渡る！まるで取引現場を押さえた時のような、はたまた銀行強盗か、場違いな声量で怒鳴りつける。

「うおっ！！なんですか！？あなた！！」

僕が声の主を見るよりも早く、店員が答える。

「ラッシュだ！！伏せる！！！」

隆が叫びながら伏せる！

僕は、一瞬頭が真っ白になったが、状況を把握した。

そこには強盗がいた。

咄嗟に拳銃を見ると、引き金に指を掛けていない。ずぶの素人じゃなさそうだ。

格好は帽子にマスクに拳銃。それと大きなバッグを肩から提げている。まんまドラマの銀行強盗だ。金目当ての小悪党か。また、走ってきたのか息が荒い。

生まれてから一度も強盗に巻き込まれた事が無かったが、あまりにも想像通りの強盗犯に呆気をとられていた。

しかし、犯人から発せられた要求は、予想とはちがった。

「食料をだせ！！水もだ！さっさとしろ！！あいつらが来るぞ！！！！！！」

突きつけられた銃とバッグに、店員は戸惑いながらも、答える。

「！？分かりました！出しますから誰も撃たないで下さい！」

店員は手を上げながらレジ置き場から出る。強盗は固まったままの僕に拳銃を向け、伏せるように指示する。伏せながら周りを見ると、強盗の指示で、他の数名も隆を真似て、背中で手を組んで伏せていた。

強盗は棚の向こうへ移動したようだ……

強盗が棚の向こう側に行ったからか、先ほどまでの緊張感は和らいだ。小声で隆に話しかける。

「こういつ時ってパニックって動けないな、本当に一瞬止まったよ……」

「……映画見てて良かったよ。まったく」

二人が小声で話し合っている間にも、強盗の声が聞こえる。

「早くしろよ！その袋にありったけ詰めろ！！俺は出口を見張ってる！！ちゃんとやれよ！！」

「分かりました」

そう言っただけ強盗は出入り口付近を見張る。リボルバーらしい拳銃で外と店員を交互に見ている。

……おかしい。おかしいぞ。

「隆ちょっと……」

出口の方へ顔を向けている隆に話しかける。

「ねえおかしくない？」

「なにが？」

「どうして金じゃないんだ？食料なら金で買えるのに」

「分からねえけど……腹でも減ったんじゃないの？」

「まあ理由はともかく、さっき言ってた”あいつ等”って何だろう？」

「警察だろう。それより静かにしとけ……」

そう言っただけ隆はまた出口の方へ顔を向ける。

「おい！早くしてくれ！！！！困まれるぞ！！」

強盗が叫んだ。落ち着きのない足音が聞こえる。

「もう警察が来てるのか？早いな」

……返事が無い。いや、返答を求めるような言葉じゃなかったのだ
が、隆は出口を向いたまま後頭部だけ此方に向けている。

「うわ……おい！見てみるよ！あれ！」

隆がびっくりしたような声あげる。しかし出口付近の強盗は隆の荷物で見えない。

「どうしたんだ？何かあったか？」

「来るぞ……来る！！」

隆はそう言うのと素早く立ち上がり、手を上げる。

「おい！お前！！何やってる！！！」

「お願いですから!!何も取りませんから出させてください!!」

強盗に負けず劣らずの音量で、隆は手を上げたまま強盗に話す。いきなりなんだ？何があつた？外を見張っていた強盗は、振り返り、隆を見る。

「なにやってんの！ 隆！！」

「お願いしますよ！お願いだから！！」

「うるさい!! 黙れっ! あいつ等が寄ってくるだ! うああああああああああ!!!!!!!!!!」

外から視線を外した突然強盗が此方に倒れこんできた！見てみると、高校生くらいの青年が強盗相手に取っ組み合いをしていた。

「うわあああわわあ！！！！離れろ！！糞！！！」

勇敢にも立ち向かった青年は、拳銃には目もくれず、強盗に取っ組み合いをしかける！

尻餅を付きながら、呆然とその二人を見てみると、とっさに隆が手を引っ張り僕をおきあげた！

「見てみるよ！！武！！！」

驚いて突っ立っている僕の肩を叩き、外を指差す。

僕は、強盗と格闘している青年から目を離し、外を見る。

「な……なんだよ！これ！！！」

そこには、人が人を食らいつき、死に物狂いに逃げ回る、まさしく地獄絵図だった

外に出たから……（後書き）

作品読んでいただき、ありがとうございます。

まだまだな初心者なので、感想やアドバイスなどいただけるとありがたいです。

次回から戦闘シーン等入れていきたいと思っています。

また頑張って書きます。よろしくお願いします。

ヒヤッハー！奪え奪え！！（前書き）

今回は少しバトルシーン？入りたいと思います！良かったら見ていってください！

前回のあらすじ

目の前の光景に、僕は驚いた。

「なんだよ！！これは！！！」

コンビニが強盗に襲われて、何十分も経たない内に、コンビニは囲まれた。

それは警官じゃない。野次馬でもない。マスコミでもない。

道路の向こう側で起きていたのは、

血だらけの人が、人が、人が、生きた人間を食らう……

それは地獄だった。

ヒヤッハー！奪え奪え！！

僕は驚いた。目の前の光景が信じられない。どうしてこうなった？

「……どうなってるの？」

僕は隆に質問する。だが、答えられる分けが無い。これは常識の範疇を超えている。

「おい！あれ……見てみる」

隆が力なく指差す。その先には、

腹が裂けている男性が血を撒き散らし、頭が割れ、血まみれの女性
が歩いていった。

「ああ！？嘘だ！歩いてるぞ！！！」

「特殊メイクじゃないよな！？」

「こんな田舎の街中で撮影なんて！！」

「おい！！お前ら！！助けてくれ！！」

恐怖に戦く、僕達の足元で、必死に抵抗している強盗が呼びかけてきた！持っている筈の拳銃は、今は手に無い。

「そつちに銃がある！！弾き飛ばされちまった！！こいつを撃つ
てくれ！！頼む！！！！」

必死に抵抗している強盗は、拳銃を弾き飛ばされたらしい。

「相手に弾かれてどうすんだよ!!」

「撃つって!! あんた強盗でしょうが!? 助けちゃ不味いだろ!!
!!」

「違う!! こいつはもう人間じゃない!!! いいから撃て!!!」

必死に抵抗する強盗から発せられた一言が、僕等にこの現状の真実を教えた。

「本当に? 本当に化け物なのかよ!!!」

隆が叫ぶ。

「大声出すな! 本当だから!! 助ける!!」

ここまで格闘していた強盗の顔は、血が上って真っ赤だ。しかし、青年は手を止めない。殺す気なのか? 高校生らしいその男には、血が滴り落ちていた。

このままでは不味い。僕は柵の下に滑り込んだ拳銃を取り、一步前へ。

「おい武! 本当に撃つのかよ!」

後ろから隆が止める。しかし、撃たなければダメだ。そう心が発している。この相手がなんであれ、目の前の人間を助けなければ。

これは初めて持つ実銃だ。しかもこいつは、公務機関用のニューナンプM60だろう。感激だ。一般人なら永遠に持てない様な銃を、生きてこの手に持てたのだ。しかし今はそれどころじゃない。

少し大きめのグリップを握る。そして撃鉄を起こし、照準を定める。引き金には直前まで指を掛けない。初めての体験だが、モデルガンと同じ操作なので、大丈夫だ。後は当てるだけ。

「撃ちますから頭下げて!!」

「分かった!!撃て!!」

強盗の合図とともに引き金を引く。乾いた音とともに目の前の青年の頭部が吹き飛ぶ

筈だったが、頭部はそのまま、丸い銃創が空き、崩れるように倒れた。足元の強盗は死体を横に投げ、深く深呼吸をしている。相当体力を消耗したのだろう。「よくやった」「ありがとう」と小声で繰り返し、襲ってくる様子は無い

「当たった……こんな反動なのか」

「外さないで良かったな……武」

先ほどまで撃つのを制止していた隆だったが、後方から肩を叩き、笑顔で微笑む。

「なんだよ……その笑顔はw」

「前。見てみる。武」

隆の方へ向き直っていた僕は、改めて隆が指差す方向へ、顔を向けた……

「っ!!こっち来てるじゃん!!!!あいつ等!!!!」

そこには、先ほどの数名から、十数名まで増えた、血まみれグチャグチャな奴等が此方にゆつくりと向かっていた。

「騒ぎまくって呼び寄せた挙句、最後の銃声でこの居場所が判明だ。こいつ等典型的なゾンビじゃねえの？……なあ？強盗さん？」

レジに腕を付き、前方を見据えながら、隆が強盗へ話しかける。左手は髪の毛を掻いている。

強盗は手を付きながら起き上がると、あぐらをかく。

「ああ！そうだ！物分りのいい奴だな。お前。名前はなんて？」

「隆って呼んでくれ。そっちは武。あんたは？」

「佐藤さとうでいい。まあしかし、どいつもこいつも皆パニックになってあいつ等のお仲間になってやがるのに、お前らみたいなガキンチョが状況把握してちゃ、警察もビックリだな。」

「ガキだから分かるもんもあるってことですよ、佐藤さん」

「ああいい。さん付けなんて堅苦しいから無しだ。さっきの調子で喋れ」

「分かったよ。それにしてもまず食料確保なんて、先の事考えてすげな！おっさん！見直したよ！」

「一応30代だがな。まあ、俺はゾンビ映画とかゲームやらを専門とするいわゆるオタク」

「どうしてフレンドリーになってるんですかあ！！！！二人とも！！！！」

強盗犯佐藤とタメかと思わせるほどフレンドリーに喋る隆を叱咤し、前を指差す。

「銃の弾はあと4発です！前の道路を越えて、此処まで来られたらお仕舞いですよ！！」

「お前銃使えるのか？構え方からしてド素人な分けじゃないだろ？俺は手首捻ったからお前が使うといい」

「分かりました！早く食料入れる作業に戻ってください！！」

「店員！！終わったか！？早くしてくれ！！」

「はい！！終わりました！！」

「店員！資材でもパイプでも、武器になる物ないか！？」

「はい！レジに警棒と、あと店の奥に有ります！」

「分かった！！取ってくる！」

「お前らも固まってないで手伝え！早く！！！！」

僕が出口を見張り、新たに道路の向こう側からくるゾンビを警戒する中、食料と武器を店内で調達する係りに分かれた。

先ほどまでの空気から打って変わり、店内にいるすべての人間が力を合わせている。さっきまで帽子にマスクだった強盗犯佐藤も今は両方とも外して、傍からだどリーダー的な筋肉質なオタクのおっさんだ。

「よし！水は大体入れ終わったぞ！」

「こっちは何入れる！？」

「長期保存の利く奴全部だ！生活用品なんかもいれてくれ！」

「ヒヤッハー無料じゃ無料じゃ！！」

「もっとバックないの？」

「3個だけだ！選んで入れてくれよ！」

ゾンビ達が迫る中、食料と武器の調達は順調に進んだ。ゾンビ共の足が遅かったのと、先頭集団が倒れたのが幸いした。

「食料に武器、全部出来ました!!」

そう言ったのは、最初に強盗が入ってから、黙々と作業をしていた、レジ店員の山田太郎だった。

「よくやった!!山田というのか!これからもよろしく!」

気分が良くなった佐藤は、肩を叩き、満面の笑みで握手を求める。

「はい!がんばりましょう!!」

山田太郎は、そう言うのと硬く握手をした。たぶんバイト生活で今日初めて心から笑ったに違いない。そう思わせるような喜びようだ。

「皆さん!裏口がありますので、そちらから脱出しましょう!」

そう高らかに提案した。

店の荷物を背負い、鉄パイプを持ち、レジの金をポケットに入れたその姿で、日ごろの恨みを晴らすかのように先陣を切る様子を思い描くと、まさしく現代に蘇えりし勇者といっても過言ではないだろう。

その勇者山田の後に続き、僕、隆、コンビニ客3人、それと佐藤さんが、店を出る計画だ。

コンビニ前の駐車場。その前を横切る道路にゾンビは侵入していた。先ほどよりも少しゾンビが増えている……不味いな。早く行かないと。店の奥へ戻り状況を伝える。

「いくらゾンビの足でも、もうすぐ此処まで来ちゃいますよ。いくなら早めに」

「分かった。今すぐ行こう！皆準備いいか？」

佐藤の問いかけに、全員が頷いた。

「ようし！皆さん！行きますよ！！私の後ろについてきて下さい！」

コンビニ店員山田の小声の掛け声とともに、僕達はコンビニ裏手の敷地へと飛び出した

ヒヤッハー！奪え奪え！！（後書き）

一応銃撃のシーン入れましたがどうでしょうか？実を言うと実銃撃
った事無いのですwいろいろ想像で補完してますが、リアルに書け
るように次回も頑張ります。

感想・アドバイスよろしくお願いします。

次回は店の外へ出て、一先^ず町を探索したあと、誰かの家に行こう
と思います。

ドライブの始まりだ!! (前書き)

書きとめていた分、投稿します。今回は短めです。

ドライブの始まりだ！！

「いくぞお前等！！」

勢い良く裏口から店を出た僕たちは、コンビニ店員山口の指示で、搬入作業に使っていた軽トラに乗った。

「都合よく車があるとは！やるな山口！」

「はい！個人経営のコンビニですから、仕入れも店でやってるんですよ」

「お前が店長か？」

「いえ！店長はバカンスに行ってます！」

勇者山田が運転席に座り、助手席に佐藤が座った。その他は荷台に上り、周囲を警戒する。

「皆乗ったか？」

「はい！OKです！」

「周り見張つとけ！一匹も荷台に上らせるな！」

「了解した！」

「銃はどうします？」

「温存しておけ！いざというときに使う」

「わかりました！行きましよう山田さん！！」

ハイテンションな山田が、前を見据えながらキーを回し、エンジンを掛ける。

「行くぞ！！！！捕まってる！！！！」

「おう！かつ飛ばせ！！！」
「行っけえええ！！！」

山田が運転する車は、搬入所から道路へ進み、大通りへ進む。

「ヒヤッハー！こんなのをやってみたかったんだ！！」

山田が危ないことを口走る。

「うっはwww同意www超楽しいはwww」

強盗を実行するくらいだ。佐藤もやばい。

「うおお！！山田ああ！！武器屋だ！！スポーツ店にいけえい！！！」

隆もはしゃいでいる。それも仕方あるまい。まだ厨房だ。子供なんだ。

そんな事思っている僕も、実ははしゃいでいた。
ある日突然、知らぬ間に、とんでもなく非日常的な出来事が起こったのだ。

平和な日本で、今までひきこもっていた中で、突如現れたのだ。
初めて実銃に触り、初めて実銃を撃ち、初めて、初めて、

人を撃った。呆気なかった。

突然現れた強盗犯の言うとおりに、銃を撃ち、助けた。本当に呆気なかった。

今思えば、撃った人がゾンビじゃなかったらどうしたのだろう。これ
れが、本当の人間で、強盗を捕ま

えるために行ったことだったとうなったのだろうと。

今だから言えることは、あの青年は人間じゃなかったという事。

「山田さん！！ホームセンターも行きましょう！！いい物あると思
います！！！！」

明るいい声で提案する。そうすると、佐藤さんが答える。

「お！お前分かってるな！！偉いぞ！！名前、武だったっけ？」

名前を覚えていたのだと、少し微笑む。

「はい！そうです！」

「よろしくな！」

「こちらこそ！」

これから始まる地獄を、まだこの時は感じなかった。

ドライブの始まりだ！！（後書き）

少し短くなりました。今回は主人公の心情ということで、次回から町を探索していきたいなと思います。

感想・アドバイス等、気軽にコメントしてください！

家族の為、行って来ます。（前書き）

今回も、戦闘少なかったかな？本当は銃撃戦を中心に描きたかったんですけど、まだまだ先になりそうです。一応接近戦？鈍器での戦闘もあります。

家族の為、行つて来ます。

一同をのせた車は、搬入口を出て、人気の無い道路に進む。

道中は、特に衝突は無かった。田舎だらか？静かだった。

しかし、途中で事故を起こした車両等が疎らにあり、実際にこの異常事態は起きているのだと認識させられた。

今は田舎町の道路を、右へ左へ走っている。この町は、曲がりくねった道や坂が多い。

「本当に静かな町だな」

佐藤が呟く。先ほどとは打って変わって、真剣な表情をしている。そんな様子を心配したのか、隆が話しかける。

「佐藤のおっさん。どうしたの？さっきまでのテンションは？」

隆が荷台と運転席を仕切る窓を開け、話しかける。「さん」でもなく「呼び捨て」でもない「おっさん」と言う言葉に親しみを覚える。僕はまださんがいい。何かと目上なのだ。

「ああ……今はな、これからの事考えてたんだよ。……どうやって暴れようか、な」

佐藤さんは、ニヤリと笑うと荷台の方へ体を向ける。

「ようし！まだ自己紹介終わってない奴は、順に発表してくれ！あとは武器の調整だ！握り手にテープ巻け！ちなみに俺は佐藤だ！」

一通り喋ると、また前方へ注意を向ける。そういえばまだ名前を知らない人が3人いる。

一人目が自己紹介する。

「私の名前は西野^{にしのだ}夕。高三の学生です。よろしく」

そう言うってお辞儀をしたのは、コンビニで食料入れの手伝いをしてくれた、女性の西野夕さんだ。見た目は綺麗で、優しそう。サラッとした黒髪が特徴的だ。しかし、手には店にあったラック用の鉄パイプを確りと持っている。

「俺の名前は高橋^{たかはし}健太。高二で剣道やってます。よろしく」

二人目の彼も、またお辞儀をする。剣道部所属らしい。戦力になりそう。手に持った鉄パイプも、うまく扱えるだろう。

そして最後、三番目の男性が自己紹介をする。

「私は横山^{よこやま}一です。38歳で、結婚していて家族がいるんです！家に妻を残したまま、買い物に来ていました！家に戻りたい！戻らせてください！」

どうやら、この横山という方は、家に家族が残っているらしい。そして帰りたいのだと。

様子を見ると、どうやら今まで言うタイミングを計っていたらしい。鉄パイプを握るその手は、家族への心配と共に、だんだん力強くなっている。

「お願いします！家族を助けたいんです！」

家族を思う気持ちは誰でもある。きっと今すぐにも行つて、助け
てきたいのдарう。話す声が熱くなる。

佐藤さんは、車を停車させ、荷台の方へ顔を向ける。

「横山さん。別に強制してまで、この車で貴方を連れて行くことは
しません。貴方の未来は貴方自身で決めてください。いや決めて下
さつていいんです」

佐藤さんはそう言い、車を降りた。そして横山さんの所に向かう。
手にした物を横山さんに渡す。

「これは……」

「お守り程度ですが、受け取ってください」

横山さんの手に、確りと渡したのは、コンビニで入手した、防犯用
の特殊警棒だった。

「その短いパイプよりはリーチがあります。また、決してゾンビ達
に噛まれずに切られずに、なるべく人が多い所を避けて、警察や駐
屯地などに向かつてください。ですが、もし建物に人が押し寄せる
場合、いくら日本の警官だって、問答無用で撃ってきます。その場
合は清潔な服を着て、警官個人のところに保護されるようにしてく
ださい。確証はありませんが、頑張ってください。」

「ありがとうございます。気をつけます」

「残念ながら、付いてはいけません。我々は今から武器確保に向か
います。いずれ又、どこかでお会いしましょう」

佐藤さんはそう言うと、深くお辞儀をした。その姿からは、先ほど

までの陽気さは欠片もない。

「はい！行ってきますす！」

横山さんの声が元氣な響く。家族を守る気持ちで、彼を突き動かしたのだろう。駆け足で道を戻る。佐藤さんが、顔を上げたときには、横山さんはもう見えなかった。

「……酷い話だ」

佐藤さんが呟く。その顔はなんだか申し訳なさそうな、悲しそうな顔だ。前方を見渡しながら、僕達に問いかける。

「こんなのは酷い話だよ。ゲームじゃなく、映画でもない。一人で如何こうできる問題じゃないんだ。家族もいるし、親戚だって、友達だって……助け合わないと、この先はやっていけないだろうな。」

「……それがこの人生の醍醐味じゃないですか？」

僕が生意気に答えると、佐藤さんは今までと同じように、楽しそうな笑顔になった。まるで昨日やり残したゲームを、翌朝また出来るかのように。

「その通りだ！！行くぞ！！ゲームはまだ始まったばかりだ！！！」

佐藤さんが助手席へ駆け込むと、勇者山田が止めていたエンジンを掛ける。

「感動のお別れだったけど、もう出発だ！！後の二人！夕に健太！よろしくな！！さあ出すんだ！山田太郎！！！！」

「一応だけど俺のことは隆って呼んでくれ！！趣味はFPS！！！」

「！！」

「俺も分かった！！俺のこともよろしくな！！！！」

「分かりましたから、大声だと敵来ますよ」

「コレから先は、田舎町で唯一のホームセンター「カナヅチ」だ！
！敵がウヨウヨいるぞ！！気を引き締めろ！！！！」

「全員準備よし！発進してください！」

「っあいいしたああああ！！！！行きまあー！！！！ス！！！！」

勇者山田が運転する車は、狭い裏道を抜け、町の中心部にあるホームセンター「カナヅチ」に向け全速で発進した。

発進して、五分も経たぬ間に、現在まで、合計で十匹程度のゾンビが、疎らに攻撃を仕掛けてきた。そしてまた一匹ゾンビが接近してきた。

「FUCK！！ゾンビだ！！殴り殺せ！！二度殺せ！！！！」

佐藤さんは、先ほど夕さんに助手席を変わり、自ら荷台へ移って、壮絶なゾンビハンティングを開始していた。

「ねえ！頭狙ったほうがいいって、映画で言ってたけど！」

「タ！よく知ってるな！常識だが偉いぞ！！」

「わわわ！！もう一匹そこに！！早く倒して！！」

「任せろ！！ヒッハー！！」

佐藤さんが振り下ろした特製の鉄パイプが、ゾンビの側頭部にクリンヒットした！ゾンビはそのまま左に吹っ飛び、死んだ。いや二度死んだ。

「っは！！俺が作りし最凶の鉄パイプの味はどうだ！！グリップ強化と手首のランヤードで、すっぱ抜け防止だ！！ひれ伏せゾンビども！！！」

そう言いつつコンビニから持ってきた使い捨てのウェットティッシュで、鉄パイプを拭う。

「佐藤さん！それ錆びちゃうんじゃないですかね？」

「付いてる血が飛び散って誰かの目に入るよりはマシだ！！それに武器ならこれから寄り道するスポーツ店で仕入れようと思ってる！お前なら知ってるだろ？あの店！」

僕の疑問にあっさりと答える佐藤さん。「あの」スポーツ店にも寄ることも分かった。

この町のスポーツ店は、実を言うとほぼ武器屋なのだ。一応木刀だつてボウガンだつてスポーツ用品に入るのだが、店長の趣味で、護身用具なんかも置いてある。昔僕が夢見た武器屋の店主を、実際にあの店長は適えたのだ。尊敬して止まない。ゾンビになってないといいが……

「あともう少しでスポーツ店「ミリシア」だ！！横付けしてちゃちゃっと片付けるから、皆見張っててくれ！」

「じゃあ私運搬します」

「あ僕も運搬で」

「お前は拳銃持ってんだから警備してくれ」

（……さっきまで利き手でゾンビ殴ってたじゃん。……まあ銃持ちたいからいいか）

「分かりました！警備します！」

「山田と武、健太は車周辺を見張っててくれ。俺と隆、夕は素早く荷台に武器や使えるもんを出来るだけ運搬する」

「りょーかい」

ちなみに「ミリシア」と言うのは、英語で「民兵」の意味らしい。隠す気ゼロで、逆に清々しい。

あと少しの所にある店に向けて、車は安全運転で移動する。実際は緊急時のゾンビ^{パニックほつし}耐久訓練という名のゾンビ狩りに付き合わされて、低速なのだが……

僕は、佐藤さんから貰ったニューナンプM60を弄る。シリンダーラッチを押し、シリンダーをスウィングさせる。見てみると、弾はあと4発。空薬莢が一つあり、撃鉄の打撃痕が確りと残っている。空薬莢は今ほ出さない。暴発防止に役立つといいが、特に意味はない。丁度刑事物のドラマを見ていて、この銃のモデルガンが欲しくなっていた所だったので、トイガンよりも実銃を先に触って撃つなんて、本当に感激だ。この銃の採用年数は1960年と言われているので、もうそろそろ他の新しい銃と順次交換されていると噂に聞いている。本当だとしたらまさに今、警官か皇宮護衛官、海上保安官等に入らないと、永遠に撃てなくなってしまう。日本の公務機関連用だから、海外の屋外射撃場では撃てないのだ。しかしそれを覆し、今この場で持っている。佐藤さんの話によると、倒れていた警官から取ったらしい。頭からガッツリ食われていたため、ゾンビ化の心配は無かったみたいだ。それにしても、その警察官はどうしてこの拳銃を使わなかったのだろうか？使う暇が無かったのか？それとも……

「よし！店は目の前だ！！皆準備してくれ！！」

佐藤さんが呼びかけで、ハツと我に返る。こんな時考え事をしていたら、注意不足で敵に殺られてしまう。

気を引き締め、周囲を警戒する。そうしたら、店の目の前に到着した。久々のミリシアだ。ガラスの壁にデカデカと「護身具、防犯グッズ販売中!!」という張り紙がしてある。

「着きましたよ！皆さん！」

勇者山田、店内での紳士オーラを放ち、につこり微笑む。営業スマイルの様な本気の笑顔に、元気を貰った一同は、あらかじめ決めた役割を実行する。まず僕は警備担当だ。荷台の上に立ち、周囲を見渡す。健太さんや山田さんも一緒だ。その他のメンバーは、佐藤さんを先頭に店内へ進入する。

「た……助けてくれえ！！！！！！！！！！」

突然、店内から助けを求める声が聞こえた！荷台に立ち、ガラス製の扉の中を上から覗く。

そこには、会計口の下で、ゾンビの手を掴み、噛まれない様に必死に格闘している店長の姿があった！！

「店長お！！！！！！」

僕はとつさに荷台を飛び降り、拳銃を構えながら、店内へ突入した

家族の為、行って来ます。（後書き）

またこんな様な展開で、次回へ続きますw始まったばかりで、戦闘シーンも少ないですが、感想・アドバイスなど頂けると、嬉しいです。またそれを糧に、よりいっそう頑張って書けますので、どうぞよろしくお願いします！

店長お!!!（前書き）

今回は主人公武が通うスポーツ店という名の武器屋に、突撃します。
また、ぶっ通しで書いているので、誤字や読みづらい所があったら、
その都度編集していこうと思っています。

店長お!!!

「た……助けてくれ!!!!!!」

店内から、助けを求める声が聞こえる！荷台から見たら、会計台の下でゾンビと格闘している店長の姿が見えた。襲い掛かっているゾンビは、背中から骨が見えている。

「店長お!!!!!!」

僕は、荷台を飛び下り、拳銃を構えて店内へ突入した。

「大丈夫ですか！？店長!!」

佐藤さん等が囲む中を掻き分け、会計台に登り、店長を襲っている奴に銃を向ける。

「撃ちますから、血が入らないように、目を瞑って抑えてください!!」

「早くやってくれ!!」

僕は、店長を襲うゾンビに照準を合わせ、引き金を引く。店内に大きな音が鳴り、弾丸はゾンビの頭に命中した。ゾンビは血しぶきを後ろの壁に塗りつけ、動かなくなった。店長がゾンビを横へ投げる。

「はぁ……はぁ……ありがとう。助かった。君は、この前来てくれた子だね……ありがとう」

店長はそういうと、レジから出て椅子に座る。覚えてもらえてたん

だ。ちょっと感激する。たまにでも通ってみるものだ。

「ああ……何なんだ？　いったいこれは……薬品会社なんかが作ったのか？」

店長は汗を拭い、僕たちを見渡す。どうやら、ゾンビと言う事は分かっているらしい。

「はい。そうです。この町にはゾンビがいます。そして多分世界中にも」

「なんだって……本当にゾンビがいるのか？　じゃあ大変じゃないか！　日本にはまともに銃もないぞ！？　自衛隊だって足りないし、警察官なんて当てにできない！　世界までそうなら、一体どうすればいい？」

店長は狼狽する。さすがにオタク気質だけあって、飲み込みが早い。ゲームや映画の警官が役に立たないのも、分かっている。実際、真先に壊滅するのは病院か警察だろう。人が集まって混乱し、機能しているのも時間の問題という所だ。店長を救ってから、外にいる二人も中に入ってきた。銃声を聞いたからだだろう。

「大丈夫ですか！？」

「大丈夫だ！　心配ないから警備していてくれ！」

分かりましたと頷くと、山田さんと高橋さんは外へ戻る。

「……世界……そうだ、テレビをつけてくれ。情報が欲しい」

店長はそう閃くと、レジの奥にある薄型テレビをこちらに向けて、電源をいれた。

「ザア……ええ！こちら汐留のテレビ局です！ご覧ください！！目の前にいる、暴徒と化した市民が、警備員を襲っています！！まさに地獄絵図です！！暴力によって我が汐留第三テレビ局の職員に負傷させています！！あつ！！見てください！！暴徒の一人が職員に噛み付きました！！こっちに來ます！！！！……暴力は止めてください！！やめ…キャア！！！！ああああ！！！！……ザザザ……」

皆が固まった。佐藤さんはテレビ食い入り、目線をそらさない。店長は手で顔を覆い、うな垂れている。

「おい……剛くん。これって不味いんじゃない？」

店長が佐藤さんの方へ向かって囁く。剛、と言うのは佐藤さんの名前だろうか？

「こいつは不味いですよ。マスコミはまだゾンビの存在を認識していない。政府もまだ非常事態宣言すら出していない。これは被害が大きくなりそうだ……」

佐藤さんが神妙な面持ちで答える。どうやらまだゾンビその物の存在を公表していないらしい。ヤバイぞ……これでは本当に病院に感染者が押し寄せ、警察署にはゾンビが連行され、ライフラインを司る重要な医者が、安全を確保し、法を守る警察官が全滅してしまうじゃないか！

「佐藤さん！大変です！銃声を聞きつけてゾンビ共がゆっくりこっちに來ています！！」

「不味い！！マスター！この店の物持って行ってもいいですか！？」

もちろん貴方も一緒に！」

「ううん……分かった！！命には代えられない！！皆手伝ってくれ！！！」

店長はそう行つてポケットから鍵を取り出す。

「ここで使えるのは、木刀に警棒、あとはナイフ類だ！飛び道具はレジの奥に保管してある！！」

「よし！ちゃちゃつと荷台に詰め込め！！！木刀は何本あつてもいいぞ！！替えが利くと便利だ！」

「これがボウガンだ！矢もあるから、全部持つていこう！！軽犯罪法は今は無効だ！！！」

店長が取り出した、ボウガンが入った箱が山積みになった台車を、僕は外へ運ぶ。

外に出ると、左右両方からノロノロとゾンビ達が迫ってきていた。素早く荷物を運ばねば！

「これをそつちに！」

「OK分かった！」

初めて夕さんと会話した。しかしそんなことを考えている暇はない。黙々と運送する。行ったり来たりを2回ほど繰り返し、すべての荷物を運び終えた。

「もうこれで最後だ！皆車に乗れ！！山田と夕は車の中！その他は荷台でゾンビを車に近づかせるな！マスター行きますよ！！GO！GO！GO！」

佐藤の掛け声とともに、6人はそれぞれ車に乗った。

「俺と武でゾンビを牽制するから、マスターと隆はボウガン組み立ててください!!!」

「様になってるな! 剛くん! 分かった任せてろ!」

「山田あ! 一旦ホームセンターで武装を整える! 種と土も貰って行く! その後はクルーザーでも奪って事が収まるまで自給自足でもするか! 発進しろ!!!」

「分かりました!!! 行きマース!!!!!!」

一同を乗せた車は、店の前を出て、ホームセンター「カナヅチ」へ向かう。途中、道に倒れている青い服の男性を見つけた。作業着ではなく、帽子もしている。……もしかして!!

「止めてください!!! 警官です!!!」

「なに!? 何処だ!!!!」

「その木の下の所に倒れていました!!! 銃があるかもしれません!!! 取ってきます!!!」

「ちょっと待て! 危ないから鉄パイプ持ってけ! 死んでも試しに一回殴れよ!」

「はい! やってみます!」

そう言うと、僕はまたも荷台を飛び降り、拳銃を構えながら、倒れている警官に駆け寄る!

「大丈夫ですか!? 生きてますか!? …… よっしゃ死んでる!」

一瞬危ないことを口走ってしまったが、気にしない気にしない。仰向けに倒れている警官は、首から血を流している。佐藤さんの言い付け通り、鉄パイプを思い切り振り下ろし、顔に当てた。

死んでるからだろうか？頭がグラグラしている。首が折れたようなので、これで襲われる心配はない。我ながら酷い事したな……そんな思ひは、ホルスターの中にある物で吹っ飛んだ。

「ぴ……P230！？日本モデルだからJPか！？凄い！！こんな田舎町に配備されているのかよ！！！」

あまりの事に心が躍る！！てっきり、今もっているのと同じ、ニューナンブM60か、よくてもM37エアーウェイトかと思っていたが、これはオートマチックだ！SIGから輸入している、日本向けモデルだ！これもやはり、トイガンを見るよりも早く、実銃を見た。そして触った。

あと、自分が思っているだけだろうか、一応ここは政令指定都市だった。中心から離れているだけか。プチ田舎だ。

僕は、警官の腰から付いているランヤードを外し、ついでに警棒と手錠を取って、急いで車に戻った。

「戻りました！出してください！！」
「了解」

山田さんが車を出す。座っている足元を見ると、完成しているボーガンが五つあった。

「ボーガンがこれだけあると心強いですね」

「ああ。今週はあまり売れなくて、丁度残ってたんだ。ラッキーだったよ」

「武！警官は何持ってたんだ？」

「P230JPです！8発入るオートマチックですよ！！あとは警棒と手錠ですね」

「おお！すげえな！！大量じゃねえか！警棒と手錠まで持ってくるとは！俺は拳銃取っただけだったからな。取れるものは取ったほうがいいぞ」

「はい！分かりました！」

「おい武！俺にも見させて！」

「分かった。隆」

「隆くん。そっちの金具取ってくれないか？」

「これ？」

「ああそれぞれ。ありがとう」

「それでさあ隆。聞ってるの？」

「ああごめんごめん」

こうして僕たちは、ホームセンターへ向け車を進めた。

店長お!!!（後書き）

感想・アドバイス等、待っています！よろしく願いします！

猟銃を片手にDQNカー乗っている生徒がいる東高校には死んでも行く気にはな

どうも。グダグダですが、一応ホームセンターはあと少しです。ちなみにタイトルの東高校は存在しませんのでwもし同名の高校がありましたら、そちらの高校とは全く関係ありませんので、悪しからず。

また、修正点がありましたら、見つけ次第修正していこうと思います。

獵銃を片手にDQNカー乗っている生徒がいる東高校には死んでも行く気にはな

店長を乗せ、計七人となった僕達。道を大通りから外れて、裏道へ入った。倉庫等の建物が密集している。元々ただっ広い土地なので、駐車場等が沢山ある。

こっちの方は近道だ。ゾンビ共も少ないだろう。僕は拳銃を握り締め、周りを警戒する。

「本当に、現実には起こるとはな……失踪事件や獵奇殺人は前兆だったのか？」

一通りボウガンの組み立てを終えた店長が話す。確かに先週あたりから、登山客が失踪したり体中を食いちぎられた死体などが見つかった。犯人はまだ捕まっておらず、TVの特番をどこの局も放送していたっけ。

そんな事を考えているうちに、僕らの車は平原に出た。この隣は山で、そこには寺があつた。ここはその山の敷地内の平原に面している道路だ。ここにはよく友達と遊びに来ていた。

「誰がこんな事を？まさか医薬品会社が秘密裏にウイルスを作ったとか？」

「あるいはどっかの国の生物兵器なんかか？こんな事するのは変態科学者しかいねえよ」

「いや、もしかして宇宙から来たミクロの宇宙人とか？脳みそ操ったりして！」

「それは有り得ないだろう。どっかの資料で、宇宙人が攻め込んでくるか、ゾンビ発生するかで

佐藤さん等が話し合うが、答えなど分からないのが現状だ。分かったのは、ゾンビは映画と同じく、頭が弱点だと言うこと。そして、日本のTV局の情報によると。全国、全世界にゾンビが発生していると言うことだ。

「何れにしても作れるとは思いませんよ！と言うか作る意味が分かりません！こんな惨い事！」

運転席の夕さんが答える。走行中からか、感情からか、声も大きくなる。

「そうだな。こういう事態になって、どっかの誰かが喜ぶなんて考えられない。作ったにしても大企業が、それを支援するにも政府機関が関わっているだろう。しかし、これを作った誰かは、何時かはこいつを使うつもりだったんだよ……そのために作った。まあこんだけの範囲で蔓延してるんだ。作った奴も関係者も無事では済まないさ」

店長は淡々と喋ると、手に持っているボウガンに矢をセットする。

「この状態から、政府は何かしてくれますかね？」

佐藤さんは嫌みったらしく笑う。

「そうだな。この状態を打開できたら、総理に票でも入れてやるかな」

店長も鼻で笑う。今の政府に出来る事なんて限られている。

皮肉だが、近年国会で決定した、自衛隊人員削減に加え、警察官による相次ぐ拳銃の紛失、乱用（市民目線らしい）に伴い、よりいつそうメディアから非難され、ますます拳銃の使用が難しくなっている。これのせいで一体どの位の警官が拳銃の使用を躊躇ったのだろうか。

「せめて銃器店が有ったらなあ……銃社会でもないし、ヤクザでもないし弾も補充できませんよ」

僕はそう嘆く。いくら拳銃二挺あったって、弾がないと意味が無い。今までは至近距離だったから良かったものの、今後どう状況が変わるか分からない。少なからず弾も外し、消費するだろう。

「猟銃は？それなら店があるんじゃないか？」

「そんな都合よく店がありま……うお！！」

突然、乾いた音が周囲に響き渡る！！！！

「キヤアあ！！！！」

銃声だ！！車の側面に弾丸が当たっている！！

「頭下げろ！！！！」

佐藤さんの声で、皆一斉に頭を下げる。どうやらこっちを狙って撃つたらしい。荷台に置いてあったダンボールに穴が開いていた。

「なんだよ！！いきなり！！」

「どっからだ！！！！こっちに向かって撃ってきたぞ！」

「いいから止まるな！！！！狙い撃ちされる！！！！」

「ホームセンターまで突っ走れ!!!」

次の銃弾が発射されるよりも前に、車は開けた土地からまた住宅地へ入っていった。

「糞っ!!!どうして撃ってきた!!!」

店長が叫ぶ。手に持ったボウガンのグリップを、強く握り締めている。

「助け合うよりも、力で奪い取る。そういう考えの奴もいるんですよ。こういう世界になってくるね。マスターだって最初から分かってたでしょう?」

佐藤さんがボウガンで周囲を警戒しながら、淡々と答える。店長はただただ歯を食いしばる。

「ああ……クッソ!やっぱりあいつ等だ」

高橋さんは頭を抑える。

「あいつ等ってなんだ?教えてくれ、健太君」

店長が聞くと、高橋さんは思い出すように話す。

「あいつ等はここら辺で有名な不良ですよ!東高校の!ヤクザともつるんでいるって噂です」

「健太はどうして分かった?撃った奴が見えたのか!?」

「違います。あいつ等のド派手な車が山の所に駐車してありました……」

「銃はどうして？ 猟師から盗んだのか！？」

「たぶん鉄砲店から奪ったんだと……」

「糞っ！！！！」

佐藤さんは床を殴る。面倒な事になった。東高校と言えば不良が多い、いわばFランクの高校だ。このまま引き籠もっていたら、東高しか行けなくなると、危機感を感じていたところだった。それなのに今じゃ猟銃片手にDQNカーを乗り回す、不良の粹をこえた野郎共がのさばっている。絶対に行きたくなくなった。

「僕等の目的地に来なけりやいいんですね……」

僕がそう呟くと、高橋さんは「そうだね」と心無く呟く。

（それほどたちの悪い連中なのか？）

今はまだ、あいつ等の脅威は感じていなかった。過信と言っのだから？ それに近かった事を後悔するはめになるとは、この時まだ知る由も無い。

「皆さん！ 目的地につきましたあ！」

夕さんの元気な声と共に、この町最大のホームセンター「カナヅチ」が目の前に現れた。

猟銃を片手にDQNカー乗っている生徒がいる東高校には死んでも行く気にはな

感想・アドバイス等、良かったら書いていってくださいね！

駐車場での散弾銃の使用はお止めください。(前書き)

今回、ホームセンターに着いた武等一行は、一先ず偵察を始めます。
新キャラというほどの人はまだ出ません。

誤字・脱字は、見つけ次第修正していきますので。

駐車場での散弾銃の使用はお止めください。

この町最大のホームセンター「カナヅチ」前に到着した僕達は、一
先ず車を陰に隠して、外から中の様子を確認する

「どうです？誰かいますか？」

高倍率の双眼鏡を使い、店内を偵察している店長に、佐藤さんが話
しかける。

「……人は見当たらないな。いるのはゾンビと……死んだゾンビだ
けだ」

「えっと……ゾンビが動いている方で、死んだゾンビが動いてない
方ですか？」

「ああ。二度死んだ方ね。把握把握」

「……いやあ？あれは人間が死んだ奴かな？血が壁に飛び散ってい
るから撃たれて……」

店長が佐藤さんに双眼鏡を手渡す。店長は他の人にも、双眼鏡を出
す。こっちは普通に売ってる奴だ。

「ああ……あ？分かんないですね？ちよつとこの角度じゃ」

「じゃあコツチ来て見て。あれはどつちだ？」

店長がいた場所に佐藤さんが移動する。

「もういいじゃないですか。どつちも死んでるわけですし」

タさんがどつちも死んでたらOKでしょ？とでも言いたげに、面倒

くさそうに双眼鏡を覗く。結構飽きやすいのかな？

「いや、そういう問題じゃないんだ。ゾンビになって撃たれたのか、争って撃たれたのか……分からないと危険だ。ただはつきりしているのは、店内の人達は銃を持っている事だよ」

「うーん……血が出ているけどなあ、ゾンビも血を流すよな……」
「見ているだけじゃ何も分かりません。いつその事誰か店の中入ったほうが良いですか？あいつ等が来ても厄介ですし」

高橋さんが提案する。

「さっきの不良達がここを嗅ぎつけたらヤバイのは確かだ。しかし、この人数で店内に匿って貰うとしても、迷惑がられるのがオチだな。食料だってそんなに有る訳じゃないだろうし、逆にこっちが分ける羽目になる。そうならない為にも、ちゃちゃっと必要なもんだけ取って退散しようぜ」

佐藤さんはそう言い放ち、荷台からボウガンを取り出した。

「まさかそれで狙撃なんてするわけじゃ……」

「流石に元強盗の佐藤さんでもそんな事しねえよ。舐められないように持って行くだけだ」

「剛くん。もう行くのか？」

「そうします。早めに行つて、必要なものとして帰りましょう。どうせあそこで籠城したって、ジリ貧で食われるだけですから」

「あいつ等が嗅ぎ付けて来たらどうするんですか？あいつ等猟銃持ってますよ？」

「そんな時は遠距離から狙撃してやるよ。どうせ有効射程距離外から撃つて来る輩。ボウガンでだって返り討ちにしてやるさ。そもそも長居はしないしな」

そう自信満々に言うと、佐藤さんはボウガンに矢をセットする。持っているのは、ライフルストック型の180ポンドだろうか？通販じゃ引くのは苦勞すると書いてあった。佐藤さんは力を込めて一気に引く。これでは連射は無理だろう。一発きりだ。

「ようし！じゃあ俺が偵察行ってくるから、あともう一人付いてきてくれ。その他は車を死守だ！」

「私は車見張ってる」

「じゃあ俺はここで」

「僕も見張ってます」

「私も武器を調整しておく」

「じゃあ俺は行きます」

偵察に立候補したのは、僕の友達の隆だった。度胸があるな。

「偵察行くから、武！銃貸して！」

……そういう事か。納得した。僕は新しく入手した、P230JPを隆に渡す。出し惜しみは無しだ。

「これは8発入ってる。ここをこうして安全装置を外して、初弾装填はしてあるから、そのまま引き金引いてね」

「OK把握した。FPSとサバゲーでバッチリ練習したから大丈夫。トリガーに指触れないんだろ？」

「ああ……うん！結構音と反動凄いから気をつけてね。銃口は味方に向けないように」

「分かった！行ってくる！おっさん行きましょー！」

「おう！行くぞ！お前たち！後は任した！」

佐藤さんが立ちあがり、続いて隆もたちあが……あれは！！

「伏せて！！！！！」

僕が叫んだ次の瞬間、車のボンネットに弾丸が降り注ぐ！！

「うお！！！」

車の陰に立っていた佐藤さんは、咄嗟に地面に伏せた！僕の目に映った人影は、間髪入れずにもう一発銃弾を浴びせる！

「糞つたれ！！！！いきなり撃ってきやがった！！！！！」

「武が言わなきゃ危なかったぞ！！！」

敵が撃ち込んだ弾丸は、後ろの木に銃弾がめり込んだ。見てみると散弾だ。やっぱりあいつ等か！

「散弾です！あいつ等もう此処まで来ました！！！」

「伏せてろ！！！」

僕達に向け、もう一発散弾が撃ち出される！三発目だ！！タイヤに当たったらしい。弾ける音が聞こえた。

「今だ武！！撃て！！！」

佐藤さんの掛け声と共に、僕は拳銃を構え車から身を出し

バン！！

「うお！！！！！」

僕は銃声に驚き、即座に頭を下げた！なんでだ！？猟銃の法律では、散弾銃は最大3発しか無理なはずだ！……糞！分かったぞ！！！！

「あいつ等スパーサー外しやがったな！！」

僕が気づいた時にはもう遅く、撃ち込まれた散弾が、車の陰に身を隠していた夕さんに兆弾した！

「キヤあ！！！」

夕さんは、左肩を抑える。見てみると、どうやら掠ったらしい、血が出ている。

「夕！！大丈夫だ！！豆粒みてえな弾がちょっと掠っただけだ！！！マスター！手当てしてください！！！」

佐藤さんの指示で、店長が夕さんの手当てを始めた。この間、また一発発砲された。どうやら鳥撃ち用のバードショットらしい。ビーズみたいな小さな弾が、沢山飛んでくる奴だ。広範囲に当たるが、威力は小さい。しかも今は弾切れのはず！

「よくも夕さんを撃ったなあ！！！」

僕は車の陰からニューナンプM60を出して、夕さんを撃った奴に38スペシャルをお見舞いする！

パーン！と乾いた高い音が響き、散弾銃の男は倒れた。

「うつしやあ！！胸にピンポイントに当たってらあ！！！」

佐藤さんの歓喜の声と共に、僕は初めて銃撃した犯人の顔を確認と見る。どうやら心臓付近に当たったらしい。ピクリとも動かない。

「恨むなよ、これは正当防衛だ」

自分に言い聞かせるように、僕等を襲撃した男に言い放った。

これが人生で初めて生きた人間を殺した瞬間だった。

「コイツ……下っ端のタクミとかいう奴ですよ。いつもボスの傍にくっ付いてる」

高橋さんがまじまじと見ながらそう言った。……あれ？

「なんで高橋さんは、下っ端の名前まで知ってるんですか？」

「ああ……僕はあその学生だからね。皆しよっちゅう絡まれてたよ」

「そういう訳ですか……というか不良以外も居たんですか？あの学校？」

「実を言うと、俺も前に大人しくなった奴で……」
「「ええー!!」」

そこに居る全員がびっくりした。ここにいる大人しそうな剣道部所属の兄さんが、元不良だったなんて……その細マッチョな筋肉は、そのころ培ったのか。納得。

「あいつ等とは反りが合わなくて、一緒に居ることも無かったですね。今じゃラッキーでしたけど」

そう言つて、僕が撃った死体を見る。傍には銃撃に使つたであろう散弾銃のM870が置いてあつた。……あれ？コイツは7発装填じや？……という事はあと二発残つていたのか！？命拾いをした……

「大丈夫ですかー！？」

突然、店内から男の人の声が聞こえた。生存者だろうか。うかつに声出して、撃たれても知らないぞ。

その時、また銃声が響き渡る！店内からは悲鳴が聞こえた。しかし、ただの嫌がらせだったのか、遠くから車が走り去る音が聞こえる。

「あいつ等わざわざ遠くから見張つてたのか？」

「ははっ！！あいつ等仲間がやられたのに逃げてくぞー！薄情者めっ！！！」

「元からこいつは鉄砲玉だったとか？」

「そうかもな。まあ店内の人等は一応声掛けてくれたんだ。その返答は店の中でしょうじゃねえか」

佐藤さんは、落ちていた散弾銃を僕に持つように言った。タクミという奴のポケットには、12ゲージの散弾が、たっぷり詰まっていた。

「これだけ有れば、当分は反撃できます」

「そうだな。汚れ仕事だが、これをうまく扱えるのは、今のところお前だけだ。これからもやってくれるか？」

佐藤さんの真剣な面持ちに、僕はこう答えた。

「はい！これが僕に出来る事仕事ですので！」

そう言うと、佐藤さんは何時もの楽しそうな笑顔で「頑張ってくれ！」といい、頭を撫でた。多分この人にとっては、今起きたこの事件は、予想の範囲内だったのかもしれない。僕は散弾銃に弾を込めた。

散弾で、小さな穴が沢山空いた車を捨てた僕達は、荷物を持ち店に向かい歩き始めた。

駐車場での散弾銃の使用はお止めください。（後書き）

感想・アドバイスなど、よかつたら書いていってくださいね！

次回、新キャラ登場か？

糞っ！こんな所に居て溜まるか！！俺は帰る！！（前書き）

今回はホームセンターの中ということで。新キャラも出てきます。

誤字・脱字などありましたら、見つけしだい修正・加筆していきますので。

糞っ！こんな所に居て溜まるか！！俺は帰る！！

先ほどの銃撃から身を守った僕達は、ホームセンターへ急いだ。

「おい！開けてくれ！！食料を分けますから！！」

佐藤さんは、肩を抑えた夕さんを確り抱きながら、店のドアを叩く。夕さんの傷は、店長の緊急の手当てでだけじゃ血が止まらない。ちゃんとした止血をしないと止まらないのだ。店内に止血の包帯があるといいが。

「分かりました！今開けます」

店内の女性の声が、ドアの向こうから聞こえた。しかし、なにやら騒がしい声も聞こえた。

「何やってる！！感染した奴がいたらどうするんだ！！お前が勝手に決めるんじゃない！！」

「皆で決めた事です！さっきまで撃ち合いに巻き込まれていた人達が助けを求めているんですよ！！邪魔しないでください！！」

「餓鬼の分際で口答えするのか！！貴様！！！」

「放してください！！年上だったら何か手伝ったらどうです！？」

「何を貴様！！」

どうやら僕達の事で口論しているらしい。ガタガタとドアが揺れる中、店内への入り口が開いた。そこには、学生らしき女性と口論の相手であるう40代くらいの男性がいた。

「ありがとう！！撃たれた女性がいるんだ！！手当てさせてくれ！

「！！代わりに食料を分ける！」

「分かりました！こつちに！！」

佐藤さんの表情が和らぐ。想像以上の出血に、驚いていたのだろう。銃創は馬鹿に出来ない。

「ちょっと待て！！！本当は感染者じゃないのか！？」

「さっきの銃声聞いてなかったんですか！私達人間が助け合わないでどうするんですか！？」

男の怒鳴り声にも負けず、女性は夕さんと淡々と歩く。

「皆も来て！扉は閉めといて」

「お邪魔します」

僕はそう言つと、久しぶりにホームセンターへ足を踏み入れた。

「糞っ！どうなつても知らんからな！！」

さっきの男は、悪態をついてどこかへ消えた。

「気にしないで。あの人は加藤つて言う口だけのオヤジだから。皆は中央のスペースで待つて。あと私は加奈。よろしく」

歩きながら自己紹介すると、加奈さんは医務室らしき所へ入っていた。

加奈さんに学生らしき外見とは別の、確りとした雰囲気を感じた。綺麗な茶髪で、ショートヘアのその姿は、とても可愛い。夕さんとは違ったタイプの個性がある。三次元も捨てたもんじゃないと思っ

た瞬間だった。

「なに見とれてんだよ！武！」

「いやっ！そんな事は！」

隆に冷やかされる。女子とはあまり話した事が無いのだから、見とれたって仕方が無い。僕は隆とじゃれ合いながら、皆と店の中心部へ移動する。さすが町一番を謳ってるだけあって、広い店内には様々な商品が所狭しと陳列されている。これなら今後の武器には困らないだろう。

僕達は開けたベンチが集まる場所に出た。試し切り？のスペースだろうか、鋸などが置いてある。

「ここで待つてるか。勝手に商品取って面倒は御免だからな」

「あゝあ！疲れた！！今日だけで二度も銃撃されましたよ！」

「武！俺達が先に眠らせてもらっていいか？」

「はい。交代で起こしますから、今は寝ていてください」

「本当に悪いな。一時間後起こしてくれ。あと食料を加奈さんに分けてくれないか」

「分かりました。一時間後起こします」

佐藤さんはベンチに横たわり、ぐっすりと眠る。今まで引つ張ってきて、疲れたのだろう。

気が付けば夕方だ。僕達は朝からずっと、戦火の中を駆け抜けてきたのだ。

皆が思い思いに休憩する中、僕は先ほど手に入れた散弾銃を弄くる。危ないので弾を出して、ガチャガチャとスライドを動かす。エアガ

ンとは違い、あまり力はいらない。素早く次弾を入れられるように練習する。

「それってレミントン？」

後ろから声を掛けられる。加奈さんだ。手当てが終わったのだろうか、夕さんも隣に居る。加奈さんは僕の隣のベンチに座った。

「はい。さっきの不良から奪いました。弾付きで」

「……と言うことは、君が倒したの？その不良」

「はい。持ってたニューナンプで」

「弾はあと何発？」

「あと二発ですね」

「よし！それなら、弾薬の交換といきましょうか！」

加奈さんは立ち上がり、後ろの方へ向かって声を掛ける。

「桜ちゃん！弾薬箱持ってきて！！」

「分かりましたあゝ！」

ちょっと間の抜けた声で答えながら、後ろから女の子が出てきた。

「この子は桜ちゃんね。私の趣味仲間。あとこれが私達の武器箱！道中で拾ったり、色々苦労して集めたんだから！」

加奈さんが開けた金属製の箱の中には、仕切り別に違う種類の弾薬が入っていた！今まででは考えられない拳銃弾の量だ！その他散弾や小包など色々入っている。凄い。どれだけの労力が掛かったのだろうか。それくらいこの状態では貴重な物だ。

「凄いですね！まさか全部警官から？」

「拳銃用の弾はね。お陰で空の拳銃が一杯よ」

「散弾はどうやって？」

「猟師やら不良なんかから取ったの。さっきのあいつみたいなのが隣町とかにも大勢いてね……」

「苦労したんですね。……あの、もしかして隣町でサバゲーチームなんかやってたり……？」

「どうして知ってるの？……もしや対戦申し込んだチームの人！？」

「たぶん……。写真はゴーグルで分かんなかったみたいです」

「やっぱり生き残ってたの！？玩具でもサバゲーはやっとく物ね。これは間違いない」

加奈さんが約束の相手チームだったと分かり。僕達は話が進んだ。

どうやらあつちのチームは集合前にゾンビが発生して、バラバラになってしまったらしい。たまたま合流できた桜さんと一緒に、この辺で一番大きいホームセンターへ向かってきたのだ。そこでもやはり不良共が暴れていて、そこで初めて警官から拾った実銃を撃ったらしい。殺しこそしなかったが、足を撃ったのもうゾンビの仲間に入っているだろうとの事だった。なんでも仲間達はそのいつのことを見捨てて、車で逃げたらしい。それが先ほどのタクミとか言う野郎の集団だ。こっちに向かって進んでいたらしい。もしかしたらもう一度来るかもしれないというのが加奈さんの予想だ。その為に武装を進めているのだと聞かされた。

「と、いう訳で、こっちには散弾のシエルが少ないの。代わりにリボルバー用の・38スペシャル。あとこれは貴重なんだけど、オートの・32ACP。これは弾倉付きで5発だけ。警官が使ったからね。銃本体は、レミントンのショットガン一挺、水平二連が二挺。オートのP230JP、あと空のリボルバーが7挺。でもリボルバ

「に弾入ると、このケースの拳銃弾がほぼ無くなってしまふの」
「じゃあ、僕の12ゲージを半分渡しますので、38口径を8発い
ただけですか？」

「それだけでいいの？」

「予備に持つてるより、全部の銃に行き渡ったほうが効率いいです
しね。不良が来なければ木刀でだって戦えますから」

「そう。じゃあ弾込め手伝ってもらえる？」

「分かりました」

僕はポケットから散弾を取り出し、ケースに入れた。半分といつて
も、元から30いくか行かないかだ。15発もあれば十分だろう。
いざとなったら加奈さん達も加勢するはずだから心配無い。僕は3
8口径の弾丸を8発貰った。これで持つてる2発合わせて、5発弾
倉を二回分装填できる。

「今は何時ですかね？」

僕は加奈さんに聞く。実を言うと、今まで時計を見る暇も無かった。
腕時計はあまりないので、時間が分からない。外は夕焼けに染ま
る。

「今は七時くらいね。夏だからまだ明るいけど」

「そうですか。何だか一日が長く感じました。初めて銃も撃ったし、
なんだか人生初が多い日です」

「今の内に体力を付けないと、後で辛くなるわよ。今日みたいに少
数で攻めてくるとは限らないから。私が見張ってるから今は寝てて
いいよ」

僕は加奈さんの言葉に甘え、少し仮眠をとることにした。

「隆。後はお願ひ」

持っていたM870を隆に渡し、僕は目を閉じた

「……ああ！……だから……の……！……俺は……無い……！」

「何言つて……！！……しんじ……やめてく……もう……！！」

「うっん？」

僕は目を覚ました。何やら揉めているらしい。ギャアギャアと五月蠅い声が聞こえる。周りには交代したのだろうか、隆が寝ていて佐藤さんが居なかった。一時間も寝ていたのか？置いてあった散弾銃を持ち、スライドを静かに引く。赤いシエルが排莢される。薬室に入ってたのか。また込めなおす。

「信用ならない……あいつ等なんて……！！」

一旦静かになった空間に、また五月蠅い声が響く。勘弁してくれよ。僕は散弾銃を持ち、口論現場の裏に回る。

「食料をわける！？あいつ等が持ってきたのは水と菓子パン位だぞ！！それに不良共と撃ち合いなんて！こっちに迷惑が掛かるだろう！？店内に入れるなんて何考えてるんだ！！」

「水分とパンがあれば上等じゃないですか！？貴方はどこまでクズなんです！？同じ人間が食料をわざわざ渡しているのに！！選り好み出来る状況だと思ってるんですか！？」

「うるさい！！私は小麦アレルギーなんだ！！パンなど食えるか！！！」

「なら食べなければいいでしょう！？貴方の事情でここに来た人たちの事を追い出すなんて出来るわけ無いでしょうが！？考えてみてください！！世界中がこういう状態に……」

「黙れ！！この小娘があ！！！」

加藤という男が拳銃を突きつけた！！不味い！！！！

「動くなあ！！！！糞っ垂れえ！！！！」

下手に眠ったせいで、寝起きは最悪だ。言葉遣いも悪くなる。僕はこの加藤？だかいう男の頭に散弾銃を突きつけた。

「銃を投げ捨てろ！！床にその頭擦り付けて伏せるんだ！！！！糞野郎が！！！！」

「この餓鬼い！！！！舐めやがつて！！！！」

なにを思ったか、僕が散弾銃を確り頭に照準しているにも関わらず、この男は銃を捨てずにこちらへ向けようとした。僕はコイツを殴っ

た。

「ぐおっ！！！！」

まるで半世紀前の射撃方の用に、片手を伸ばして銃を構えていた、隙だらけの男の顎に向かつて、ストックの底で打ち付けた。持っていた拳銃は、後ろへ飛んだ。コイツは舌を切ったのか、口から血が出ている。

「ぐくえあうべー！！！！つがは！！！！お前！！！！何したか分かってんのか！？貴様！！！」

「拳銃向けてた男の顎に、一発食らわせただけですよ。ったく！」

僕は本当に機嫌が悪い。特にどうたらこうたらでなんやかんや突っかかってくる奴は最悪だ。ぶ千切れる。特に寝起きは。だから人前で寝られないんだよ。

「つかは！！！！見てみる！！！！血が出たぞ！！！！お前どうなるか教えてやろうか！？俺は元政治家だ！！！！コネだつてある！！！！救助が来たらお前だけ置き去りにしてやる！！！！」

「コイツ……救助なんて来ると信じてるのかぁ？武よ？」

「佐藤さん。どこに居たんですか？」

佐藤さんが話しかける。その手には見慣れたマチエットを持っている。通販で買おうか買うまいか迷っていた奴だ。

「ちょっと探索してたらこの騒ぎだよ。もうちょっと早く来てりやお前の勇姿でも見れたかな？」

「佐藤さん。そのナター本貰えますか？前から欲しかった奴です」

「ああ。沢山有ったからやるよ。それよりだ。そのの奴！」

「なんだ！！この押し掛け野郎が！！お前も一緒に見捨ててやる
うか！？あつー！！」

「黙れ。恫喝なんてこの世界じゃ通用しない。それに見合う武力が
なきゃな。それにお前に見捨てられる程困ってないぞ。政治家さん
よお」

佐藤さんは手に持ったナタを僕に渡すと、腰のポーチから手錠を出
した。

「こんな事に使うだろうと思ったぜ。つよしとおー！」

加藤の腕を背中に戻し、手錠を付けた。必死に抵抗する加藤を、佐
藤さんは力でねじ伏せた。

「加奈さん。なんか個室ありませんかね？できれば窓の無い部屋」

「……使っていない収納スペースなら有りましたが。畳一畳位の」

「よし！そこへ連行だ！！カッとなって銃振り回す奴を野放しには
出来ませんよね？加奈さん？」

「ええ。反省してもらいますか」

「くっそ！！覚えてろよ！！貴様等あ！！！！」

そう捨て台詞を吐くと、佐藤さんに片足を引っ張られて、加藤は引
きずられる。隣に加奈さんは「反省してください」と呟いていた。
僕は弾き飛ばした拳銃を拾う。

「コイツは何処で拳銃を？」

「多分ここへ来る前に」

「コイツが威張ってたのはそういう理由でしたか。今まで撃たなか
ったのが不思議ですね」

「皆が休憩している夜を狙ったんでしょう。もっと警備を強化しな

きゃね」

「どうせ撃つても仇討ち合戦が始まるだけなのに……」

「そうね。これは銃で解決する問題じゃ無かった。問題ですら無かった。只それだけ」

加奈さんは、佐藤さんと共に向こうへ消えていった。小麦アレルギーは大変だと聞くが、この非常時ではもっと大変だろう。しかし、それをケアする病院は今も機能していないだろう。アレルギーの人には悪いが、仕方の無いことだ。

この騒動は、店内の人々に知れ渡るだろう。加奈さんの話では、この店には、従業員あわせて30人程度が居たらしい。僕達あわせて35、6人という所か。これからはどうしたものか。

僕は拾った拳銃をポケットに入れ、また眠りに付いた。

糞っ！こんな所に居て溜まるか！！俺は帰る！！（後書き）

感想・アドバイスなど、良かつたら書いていってください！

次回は、敵襲来！？

異常な世界の 感覚（前書き）

今回は、店内での攻防戦と、こんなになっちゃった世界の価値観？とかの違いを書いてみました。異常な世界で、武達は生き残れるのか？

誤字・脱字は見つけ次第修正・加筆していきます。

異常な世界の 感覚

「起きろお！！武！」

「うんにゃ……ここは？」

僕は起きた。しかし、自宅の布団の中ではない。ここは確か……

「地獄の戦場だあっ！！！！ゾンビ共が駆けつけた！！！！寝ている暇は無いぞ！！！！新兵！！！！」

鬼軍曹よろしく隆に叩き起こされた僕は、渋々ながらベンチから起きる。店内には人々の声が響く。

「そこにバリケードを！！ゾンビ達を入れないで！！」

先頭で指揮をしているのは、加奈さん率いる僕がコンビニで出会った仲間達だ。その他にも店内にいた大人達も手伝っている。

「釘打ち機で止めよう！！その方が早い！」

「資材持ってきてくれ！！」

「俺は二階からボウガンでゾンビを撃つ！！」

「皆頑張って！！！！」

「糞っ！数が多すぎる！！！！」

僕も協力しよう！傍に置いてある散弾銃を手に持ち、駐車場側出入り口に向かう。

「遅れてすみません!!」

「武くん!大変よ!!ゾンビが多すぎる!!このままではここは破られてしまう!!」

「どうすれば!」

「そっちの階段から二階に登ると、隣の棟へ通じる渡り廊下があるの!、その窓からショットガン

を撃つて!!隣の棟は人が居ないから、あいつ等を引き付けて!!」

「分かりました!!」

僕は直ぐに階段を駆け上がると、隣の棟へ繋がる渡り廊下を走った!なるべく遠くに引き寄せるため、隣の棟の近くの窓から散弾銃を出す。

「ステンバーイ!ステンバーイ!」

僕そう念じると、入り口に群がるゾンビ共に、向けてO O B A C K ダブルオーバックの散弾を放った!大きな音を発しながら、二体のゾンビの頭に命中した。しかし、ゾンビ共は数体がこっちへ来ただけで、その他の奴等は見向きもしない!!糞っ!!

「こっちに来い!!こっちだ!!!!」

僕はもう一発撃つと、またゾンビの頭に当たる。群がっているので何処でも当たる。上からなので頭を狙うのは簡単だ。しかしまだ来ない!!目の前の大勢の人間に夢中なのか!?これじゃあ話にならない!僕は皆が居る棟に戻った。

「全然引き付けられません!!もう銃声は聞こえました!!正面か

ら撃ちましょう！！！！」

「分かった！！！！皆！銃を撃って！！！」

加奈さんの合図で、バリケードの隙間。銃眼から銃弾が発射される！

「おらぁ！！！！」

「やれやれ！！！！」

「外は地獄だぞ！！！！撃ちまくれ！！！！」

猟銃や拳銃の音が響く中、僕は昨日の夜作っておいた特製の薙刀（ナタ＋棒）を持ってくる。

「そんなの役に立つの！？」

「弾の節約です！！」

僕はバリケードの上から特製薙刀を振り下ろすと、ゾンビの頭は割れた。腐っていたのか、ドロドロの肉片がナタに付く。

「畜生！ナタは使い捨てかつ！！！！このゾンビめ！！！！」

僕はゾンビの頭から特製薙刀を抜くと、今度は水平に突き出す。ゾンビの首に刺さった。横へ引くと、ゾンビの首は皮一枚だけしか繋がってなかった。そいつは崩れる。

「大分減ってきたわ！！これなら槍だけで倒せる！！皆銃を仕舞って！！！」

「どっちにしろもう弾は少ないからな。結局は己の力に限る！！！」

ガタイの良い土方風の男性はそう言つと、自作したであろう鉄パイプにナイフを付けた槍を使い、ゾンビに刺した。突き方からして素

人じゃないよ……ムキムキのその腕がテンポ良く動く。この人は銃剣道でもやってたのだろうか？

そうしてあつという間にゾンビは倒された。残っているのは、新たに來た数体のゾンビだけだ。

「こんだけ減らせば、もう今日は安心ね。バリケードを組みなおしましょう！！皆手伝って！」

加奈さんは元氣良く声を掛ける。しかし皆はへろへろだ。

「こんなのが毎日続くのかよ！？……食べ物だって無いし、俺はもう出させて貰うよ」

「でも……外は危険ですよ？」

「ここだって何時まで安全が分からねえ。好きにさせてやんな。讓ちゃん」

「……そうですね。自分の進退は自分で決めてください」

ガタイの良い男性が加奈さんを説得した。汗を流し、釘を打ち付けているその姿は、正しくプロの大工だ。しかも洪い声で、人情感溢れる良い人っぽい。僕はこの人を親分と心の中で言おう。

「親分！こっちはどうしましょうか？」

「そっちの壁は釘が刺さらねえ。土嚢でも積んでおけ」

「分かりました親分！」

「親分！渡辺がもうここから出たいって言ってます！どうしましょう？」

「構わん。好きにさせてやれ」

「分かりました！親分！」

えええ……親分って呼ばれてるよ。めっさ呼ばれとるよ。どうやら本当の大工らしい。子分が周りを固めている。一見ヤクザの集まりみたいだ。

「武！ちよつとこつち来い！」

佐藤さんに呼ばれた。どうやら皆集まってるらしい。行こう。

「ここを抜きたい。と申し出た人は今のところ5人です。逆にここを出たくないという人も居ます。強
制はしませんので、各自見の振り方を考えておいてください！以上です！」

加奈さんがそう言うと、周りの人達はそれぞれ定位置に戻る。店内には少数グループがいくつかあるのだ。大抵気の合う人や、知り合いなどと一緒に行動している。

「どうしようか？俺等はここに長居する予定も無い。どこか安全な所へ移動でもしないと」

「前に船で自給自足とか言っていましたけど？どうなんです？」

「考えてみたが、この人数を養っていくには自然栽培じゃ足りない。今ある食用を足しても、一週間と持たないだろうな。それに年がら年中取れるわけじゃない……。言い出しといえますまん。安易だった」「それじゃあこの後どうするの？皆この手の状況詳しそうだけど、何か良い考えある？」

夕さんの問いかけに、一同策を練る。

「うーん。下手に想像してあるだけであって、実際にどうこうできる提案も無いな」

「この手のゲームは、主人公は免疫とか耐久とか有って、プロの軍人とかだからね……」

「この後永遠にこういう状況が続くんだもんな……セーブして一時離脱もできない」

「護身具売って経営しているけど、ゾンビ相手じゃ厳しいな……せめて弾薬を補給出来たらなあ」

「銃が有ると無いとじゃ生存率がケタ違いですよ。映画の死亡フラグなんか役に立ちませんか？」

僕がそう提案するも、出てくるのはネガティブな事だけだ。

「まずは……そうだな、立て籠もると確実にやられる」

「窓際に立つとゾンビに引つ張り込まれたり！」

「そうそう！あと下手に銃が有ると、弾切れで食われる。特にはしやいでる不良なんかはまさしくそれ」

「大体、主人公よりも出しゃばると死ぬな。もしくは自分を犠牲に死ぬか」

「皆やめてよ。超暗いじゃん。お先真つ暗感が漂ってるよ……」

「だってなあ……ゾンビゲーの楽しみって、謎解きか無双してるときでしょ？」

「馬鹿っ！弾を節約しながらのイオ ザードなんて最高だぞ……！
ツト イジング何かよりスリルがある！」

「……らあ！」

「いいじゃないですか……！ ツトラだって……！あの最強主人公でゾンビ共を可哀想な位無双するのが楽しいんです……！」

「……な……いよ……！」

「強いだけが主人公じゃないぞ！隆……！中には普通の学生とか……
って五月蠅いなあ……！」

「……らあ……！……い……！おらあ……！」

窓ガラスが割れた。突然だ。窓際には不良らしき人物がガンを飛ばしながら立っていた。

「糞っ垂れ！！！大事な話をしている時にい！！！」

「敵です！！あいつ等が来ました！！！」

「分かつてる！！殺してやらあ！！！」

佐藤さんは僕から散弾銃を奪い取ると、外へ向けて発砲した！！

「お前等いいかげつぷ！！！」

金髪不良の右手が吹っ飛ぶ。金髪は窓から崩れ落ちた。

「うああああああ！！！！！」

「手前え！！！！よくもぶお！！！」

今度は隣の不良に撃った！喋り掛けのその口に、散弾が貫通する。頭が吹っ飛んだ。周りの奴等もいまさら隠れる。撃ってこないと思つたのだろうか？馬鹿すぎる。

「糞おおお！！！！話し合いに来たんだ！！！！何で撃ったあ！！！」

右手がお無くなりになったパツキン男児を、庇いながら、今度は赤髪の男が叫ぶ。

「昨日のお釣りだよ」

佐藤さんはそいつの顔に向かって撃った。一瞬に頭が移動した。普通の体では有り得ないスピードだ。千切れて飛んだ。

「手前えええ！！！！よくもおお！！！！」

今度は黒髪の男が身を乗り出す。散弾で左手が飛んだ。右手に持っていた猟銃が放たれる。僕のすぐ横を撃ちぬかれた。

「止めてください！！佐藤さん！！！！」

高橋さんが止める。

「あいつ等だつて、そんなに悪いわけじゃないんです！！！！心は腐ってますん！！！！」

「なんだ？俺の心は腐ってるってか？」

「違います！あいつ等も下っ端です！！また鉄砲玉ですよ！！！！」

「鉄砲玉は帰ってこない！あいつ等も帰れない！！！！」

佐藤さんは、天井に向かって散弾銃を撃った。

「なにを！？」

「尻尾巻いて逃げろ！！地べた這いづくばって帰れ！！！！やり直すんだよ！！！！こんな世の中になったんだよ！！！！良い事してみろ！！！！必要な時だけ頼るんじゃないっ！！！！もう一度人生やり直せ！！！！」

佐藤さんは叫んだ。

しかし、その返事は銃弾だった。佐藤さんの上方を掠める。

「うおっ!!」

「それがお前の生きる道か!!……残念だよ」

まったく動じなかった佐藤さんは、確りと散弾銃を構え、撃った。
それを見ていたのか、店内からも悲鳴が上がる。

「なんて事!!彼は話し合いに来たのよ!!!この野蛮人!!!」

「そうだそうだ!!!」

「止めてください!彼はここを守るために!!」

「守るために殺すのか!?狂ってるぞ!!君!!!」

「話し合いなんて!!武器を持ったチンピラに集られるのがオチです!!!」

「平和的に解決できたろう!!!人間は平等だ!!!人権がある!!犯罪者だからって撃つんじゃない!!!」

「そんなアホな!兄ちゃんは押し掛けた犯人を撃つただけだろが!」

「あんただって!サラリーマンにもならないで土方の仕事してるじゃない!!!同類よ!!!」

「土方じゃねえ!!!大工だこの婆あ!!!」

「なによ!!!貴方!!!私を誰だと!!!」

加奈さんや、大工さん等が加勢する。しかしながら、佐藤さんは非難されている。当たり前だ。やりすぎでしょう。僕は佐藤さんの手を引いた。

「行きましょう。佐藤さん。今が潮時です」

「そうだな。行こうか」

「武君！行くの！？」

「はい。もうここに居る理由なんてありません。出ていく理由ならありますけど」

「駄目！今のは当然の事よ！！昨日撃って来た奴等でしょう！？話し合いに来たってそりゃ撃つよ

！！」

「いいんです。今回は騒ぎすぎました。また何処かで会いましょう」
「そんな！」

そんな中、僕達は、荷物を揃えた。準備は万端。心残りも無い。

この間にも罵られる。この間の加藤か？もう開放されたのか。

「二度と帰ってくるな！！」

「分かりました。もう二度と来ません」

佐藤さんを先頭に、僕達は店を出た。

「待つてください！！一緒に連れて行つて！！」

加奈さんと桜さんだ。来たって良い事ないよ？

「あんなの可笑しい！！いまさら平等だの平和だの！！この暴力に満ち溢れた現実を見たくないだけです！！」

「あれが平常な感覚なんけどなあ？」

「あの頃の平常や日常とは、もう違います。これからはこの世界の平常です」

「まあ良いじゃないですか！女の子が増えますよ！！」

「そうか？……そんなら行こうか」

「え……そんな理由で」

「気にしない気にしない!!」

隆の言葉で、少し明るくなった。

異常な世界での、ちょっとばかりの問題だ。僕は思う存分銃を握りしめよう。

僕達はこの前の車に乗った。エンジンはまだ掛かるらしい。さすが日本車だ。

「行くぞ諸君!!この先は地獄だ!!不条理と暴力が満ち溢れている!!!見失わないよう手を繋いどけ!!!」

「ハッハー!戦場は地獄だぞ!!!!ヒャッハー!!!!」

一同を乗せた車は発進した

異常な世界の 感覚（後書き）

感想・アドバイスなど待ってます！

キャラクター紹介だ！随時更新中！（前書き）

一応これまでのキャラクターを紹介します。

一度には書けないので、後から追加していきます。

キャラクター紹介だ！随時更新中！

いっしきたける
一色武

- ・主人公。中三の男で、元ひきこもり。
 - ・軽度の銃オタ。
 - ・これまで一人の人間を射殺している。
- る。ゾンビは数体。

すずきりゅうた
鈴木隆太

- ・武の友達で、数少ない親友。
- ・趣味はFPSとサバゲー。
- ・コッチはFPS厨。

さやまつ
佐藤

- ・下の名前は不明。
- ・リーダーシップがあり、皆を引っ張っていく。

- ・時々熱くなり過ぎるのか短所。
- ・ゾンビ映画が好きらしい。

やまたださつ
山田太郎

- ・所謂コンビニ店員。
- ・最近影薄い。
- ・趣味は漫画で、絵が上手い。

にしゆう
西野夕

- ・高校生の女子。
- ・長い黒髪が特徴。
- ・見た目に反し、結構喋る。

高橋健太^{たかはしけんた} ・ 高校生の男。

は大人しくなった。

・ 剣道部所属。

・ 昔はヤンチャだったらしい。今

加奈^{かな}

・

キャラクター紹介だ！随時更新中！（後書き）

後で追加・修正します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8243y/>

リアルサバイバルゲーム

2011年12月1日18時52分発行